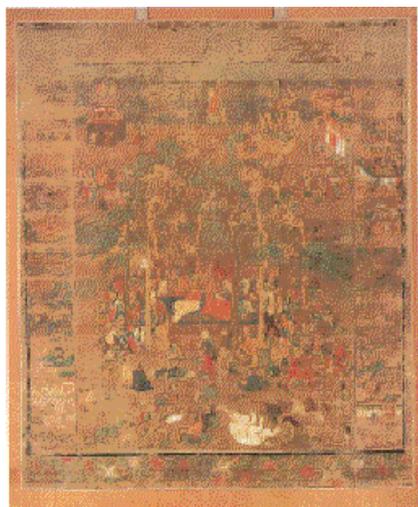


絹本著色八相涅槃図

【所在地】南さつま市坊津町坊 9423 - 1 坊津町歴史民俗資料館（龍巖寺所有）

【種別】国指定有形文化財（絵画）

【指定年月日】昭和 47 年 5 月 30 日



絹の画布に、釈迦の入滅のようすと伝を彩色で描いた仏教絵画で、鎌倉時代の作とされている。

涅槃図の中でも八相涅槃図とよばれる。涅槃図周辺に伝を配し、さらに画面の左右両端を区画して別系統の伝を描いて託胎から分舍利までの伝をそろえている。もと坊津一乗院に保管されていたが、廃仏毀釈の際民間人の手に渡り、その後、坊津町の龍巖寺に入れられた。現在、坊津町歴史民俗資料館に保管されており、毎年 11 月に公開される。

縦 2.9m、横 2.64m の画面の中央やや下部に、沙羅双樹の林の中の壇に、右を下に横たわる釈迦の姿があり、その周囲に弟子や修行者、鬼神などが集まり嘆き悲しみ、宝台の前には鳥や獣まで集まり、釈迦牟尼の死をいたんでいる。上方から母の摩耶夫人が天界から降下するようすが描かれている。

涅槃とは、仏教において、いっさいの煩悩（世俗的な悩みや苦しみなど）をなくして、迷いの世界から脱した悟りの境地をいう。語源はサンスクリット（梵語）の Nirva-na = 消滅である。釈迦牟尼は 2 月 15 日に 80 歳でインドのクシナーラの沙羅双樹の下で最後の説法の後入滅したとされ、この日、各地の寺院では涅槃会が催される。涅槃図はこの法会のとけ掛けられる伝画である。

仏教美術、特に伝画の少い本県においてわずかに現存する中世の伝画として貴重なばかりでなく、特異な八相涅槃図としても注目されている。